

2013 年度ドクター研究員研究活動実績報告書

ふりがな 氏 名	おがきわら あいこ 小笠原 愛子
(研究テーマ名) 『今鏡』の叙述意識に関する研究	
(研究活動実績) <p>前年に引き続き、『今鏡』の叙述意識について、既発表の研究内容を論文化すべく考察を進めた。帝紀には母后伝の語られ方に注目すべきところがあり、そこに『今鏡』が当時の帝位と政権をどのようにとらえているかが表れていること、藤氏大臣列伝には時代区分意識が表れていることが明らかとなったが、加えて村上源氏列伝や皇子伝にも、藤氏大臣列伝と同様の時代区分意識を指摘すべく内容の整理を続行中である。また『今鏡』の末尾二巻は多彩な文学論となっており、『今鏡』作者の興味のありかが窺えるが、特に最終章「つくり物語の行方」には、『今鏡』の叙述意識が最も凝縮された形で表れており、『今鏡』について考察する上で極めて重要である。帝紀・列伝の巻々には、『今鏡』の歴史・時代・権力への理解が述べられているのに対し、文学論であるこの「つくり物語の行方」には、『今鏡』の、叙述することそのものへの意識が表れている。『今鏡』は、全編にわたり『源氏物語』の強い影響を受けている作品であるが、分けてもこの「つくり物語の行方」には、『源氏物語』論が展開され、そこからは『今鏡』作者が目指したものが、『源氏物語』であったことが読み取れる。ここで展開される『源氏物語』論は、『源氏物語』は狂言綺語であるとする罪障論に仏教的観点から反論する形の『源氏物語』擁護論で、その論の展開には『源氏物語』「螢巻の物語論」からの色濃い影響が見られ、「つくり物語の行方」について考察するためには、『源氏物語』「螢巻の物語論」の展開についての解釈を確認することが必要である。しかし、『源氏物語』「螢巻の物語論」は、架空の物語作品を論ずる最古の文学論として重視されていながら、未だ確固たる解釈・位置付けが提示されているとはいいがたい。当該箇所については以前にも研究発表をしたが、論文化には至っておらず、今年度、改めて古代文学研究会（5月12日（日）於：龍谷大学大宮学舎西翼 2 階大会議室）において、「『源氏物語』における〈物語〉への言及」という題目で研究発表を行った。ここでは、『源氏物語』の「物語」への言及を通覧して考察したが、特に「螢の巻の物語論」については、発言者の立場による意図・機能の違いを更に明確にすべきとの結論を得た。『源氏物語』の自己言及の在り方について考察することは当該発表についても論文化を目指して執筆中である。「螢の巻の物語論」の内容は、「作り物語の行方」のみならず、『今鏡』の対史書意識や叙述の在り方など、全体に影響を与えていると考えられるため、『源氏物語』研究にも目配りしつつ、『今鏡』研究を進めていきたい。</p>	